

---

竹 本 洋

『『国富論』を読む』

——ヴィジョンと現実——

名古屋大学出版会 2005.10 ix+392+40 ページ

---

本書はJ.ステュアート研究(1995年)に次ぐ著者の書き下ろし第2弾作である。その構成はその分厚さに比して、「穀物と民衆」「利益と秩序」「投機と組織」「帝国と現代」の僅か4章だけである。これらは「8つの論点を2つずつ組み合わせた」と言うから、他の組み合わせもありえたのかもしれない。各章とも4節ほどから成り、こちらは『国富論』(以下、WNと略す。)との関連が多少は窺われる。ここでも多くは「～と～」という形を採っているが、その組み合わせの必然性が必ずしも明確ではなく、恣意的だとも言える。要するに、それらは著者があらかじめ選んだ言葉を組み合わせ、そこにWN各編各章の諸論題を適宜配分するという構成になっている。

そこで本書の内容が問題になる。「読む」と題されているから、副題に即したWN注解書として受け取られようが、これは単なる解説書ではない。その構成は際立ってユニークだが、その内容も同様で

あり、従来型研究にはまったく囚われていない。従来型の学界では、とくにリカードとマルクスという絶対的権威者のスミス論が蟠踞していた。ごく少数の論者がこれに疑問を感じていたが、若干の例外を除き、それを表面化させえなかった。他ならぬ拙著(『アダム・スミスの経済思想』2002年)が新たな論証によりその疑問を表明したのだが、かつては、両権威者に依拠したコップの中の嵐に過ぎなかった。本書は従来型研究そのものに懐疑的であるために、結果的にはその次元を超越している。

この問題の難しさは先の権威者だけが相手でないところにある。つまり、その権威に従ってきた無数の研究者が身近に現存していたことである。このような観点から日本のWN研究史を振り返ってみると、先の脱権威者のパラダイムの系譜がおぼろげながら浮かび上がってくる。これを手掛けたのは、観点を異にするが、高島善哉、小林昇、羽鳥卓也等である。そして本書は著者も自認するように、小林の影響下に形成されたという意味で、脱権威者のパラダイムの後続版として位置付けられる。

ただし、小林のWN研究は「経済史としての学史研究」とか「WNの相対化」という視点からのものだったために、その主流には位置付けられ難かった。本書はこれら小林の「相対化」視点を受け継ぎ、それを前述の枠組みの中で豊富化・多様化した。その意味で、本書は日本のWN研究史の中での一大転機に位置すべき斬新な問題提起書でもある。ただし、本書はその章題にも示されたように、WNの主題そのものを真正面からのテーマとしては採り上げていない。そこに、本書の弱点とともに特長も認められる。

まず、本書はその「序」において、某氏の『古事記』読解法「に倣って、……本書の基本的モチーフ」(17-18頁)として、WNの序論と本文とを峻別し、序論の意図による本文読解を差し控えると揚言した。しかし、『古事記』の編者序文と伝承本文とはまったく別人の作だから、その読解法はWNには当てはまらない。したがって、神話ならぬ経済科学書としてのWN独自の問題として、その峻別の是非が問われてしかるべきだ。

これと関わる本書の弱点は、前掲拙著の提題に反応していないことに集約的に示されている。労働による付加価値視点は通説に抗して拙著と共通しており、これを是としたいが、WNの貨幣認識については、著者の前著(1995年)に対する拙著の反論にもかか

わらず、これを無視して同主旨の議論を繰り返している。(109-110頁)また、価値一定の下での成長論(→人口増加論)という通説パラダイム(=スミスのリカード化)の克服とそれによる付加価値増加視点という拙著の提題についてもまったく論及しない。これは近年の内生的成長論に相当するものだが、貧困問題を初め本書の論調全体を左右しかねない根本提題なのだから、これに何の反応も示さないのは如何なものか。本書は遺憾ながら、これらの論点について眼光紙背に徹しきれないまま、全体の議論を流してしまった。その結果、通説への懐疑にもかかわらず、なお通説のリカード化パラダイムから脱皮しえず、貧困論などの行論において自縄自縛に陥ってしまった。

WNの帝国論や国防論についても、本書はそのポジティブな議論の側面を強調するが、自由貿易論に見られるネガティブな議論(非戦論)との兼ね合いでビジョン全体を総合的に把握すべきではないか。総じて、WNのネガティブな議論(重商主義批判等)が裏返されたビジョンであることを捉えきれていない。元来、WNは単なるビジョンでなく、そのコア(中核)としての長期かつ体系的な価値法則の論理等を解明することが本来の主題であったから、そこにも学問的分業の原則が働いて、軍備論が4編と5編に分割されていた。したがって、WNに国防ビジョンを求めるのであれば、分割された論理を読解者が統合化しなければならない。この統合化原則は他の多くの論点にも当てはまるものだ。

他方、本書の特長はWN中のほとんどすべての主要論点について独自の検証を試みたことにある。その内容はD.ウィンチの政治論(1978年)と重なる面もあるが、思想論や制度論など多岐多彩である。高島善哉はそのスミス論著(1941年)で「経済社会学」を用いたが、その内容とまったく異なるとはいえず、経済を軸にしてその他の諸要因を多元的に含むという意味で、本書の学風も一種の経済社会学だと言える。本書はルソーを初め当時の思想論や歴史論を広く渉猟し、WNの各議論に関わらせて適宜かれらの議論を引照している。ポーランド問題等の各国事情についてもヴォルテール等の議論と比較対照するほか、金融業、企業統治、投機論など従来軽視されてきたWN細部にわたる独自の検証を試みている。それらは確かに、「ヴィジョンと現実」というテーマにふさわしい論及であり、WNの実像を側面から照射する貴重な試みとなっている。

本書のもう一つの特長は、WNの議論をただそのまま実証的かつ客観的に理解するだけでなく、そこから距離を置いて、時には批判的な視点でそれらを受け止めていることである。前述の権威者の威を借りたWN批判は論外だが、権威者に依拠せぬ自力の古典批判は究極の力業を要する。そのリスクにあえてチャレンジした労苦を察するにやぶさかでないが、その責任もより重大になることは覚悟の上だろう。そういう相対化の方法が小林昇譲りと言える所以である。ただし、小林は経済論に自己限定したが、著者はそれから大きく踏み出している。そこに地道な研鑽の跡が十分に窺われるのだが、経済論とりわけ価値の理論に関してはいかにも物足りない。

このような両者のWN相対化論の立脚点はどこにあるのだろうか。両者に共通する研究対象はJ.ステュアートであるが、小林にはF.リストもある。それらが立脚点の一つであることは確かだが、それだけではないだろう。マルクスも一つの想源だろうが、それがすべてでもない。そこから想起されるのは、かつて高島善哉が翻訳(1935年)したザリーンの方法視点である。それによれば、経済学史には直観的理論と合理的理論との二つの系譜があるとし、前者の例が重商主義(F.リストによる意)、後者の例が純粹理論だと言う。小林と著者に共通する立脚点はこの「直観的理論」に近いのではないか。著者はその観点から、WNの諸々の議論を縦横無尽かつ是々非々に処理していく。先の「合理的理論」の立場に近い大多数のWN研究者にとっては、本書の自由奔放な言説はその巧みなレトリックと相俟って、トリックにかけられたように思われるだろう。著者の立脚点に分かり難い秘密はこの辺りにありそうだ。

そうすると、この「直観的理論」にはいかなる普遍性があるのだろうか。この問いはザリーンの翻訳から感得した高島の「根本問題」とされたものでもあり、これに応えるべく、高島はそのスミス研究(1941年)を通して「直観的理論」と「合理的理論」との媒介的統一を目指したのであった。(『高島善哉著作集』こぶし書房、第6巻末の評者「解説」、参照)本書にこのような位置付けができるとすれば、私たちは高島と同様の原点に立ち戻ったスミス論の再検討を迫られているのかもしれない。

本書の「直観的理論」にはルソー、ヴォルテール、ファーガスン、ギボン等の啓蒙思想も加味されたが、ザリーンの「直観的理論」には高島も危惧したようにニーチェの影が差していた。本書のWN相対化

論の奥底にも、本人が意図したか否かは別にして、あるいは意図せざる結果として、理論ニヒリズムが潜んでいることは確かだ。また、そこには著者の恩師・田中正司の「自然神学」説などへの応答の意味もあると言う。改めて「合理的理論」との媒介的統一が求められる所以はここにあると言える。

とくに昨今、直面している最も深刻な課題の一つは後世に残された莫大な財政負担(→貧困化)の問題である。WNも当時のこの問題に直面した中で、これに理論的に応えようとした。ところが、WNのこの理論パラダイムを退けてきた人為的政策科学がこの深刻な問題を引き起こし、あるいは助長してしまった。したがって、これの解決のためには、WNパラダイムの復元が求められる。この点でも、高島の置かれた状況と重なっているようだ。その意味で、WNに対する理論ニヒリズムは克服されなければならない。本書のWN理解もまた相対化される運命にある。

[星野彰男]